

ひらつか防災ニュースは、市内自主防災組織の活動の紹介他、防災活動に役立つ情報を市民・地域の皆様に提供することを目的としています。

防災講演会① 被災地市町村長が語る「この大地に生きる覚悟」 時事通信社解説委員 中川 和之氏

平成27年12月26日(土)
当会主催の防災講演会を開催、
中川氏には、行政トップが経験
した事例を中心に講演いただきました。

《プロジェクトの経緯》

2013年10月11日の台風26号による伊豆大島土砂災害を受け、急きょ『市町村長による危機管理の要請～初動対応を中心として～』と題した“内閣府・総務省トップセミナー”を2014年から開催、政府として初めて作成する首長向け研修冊子の編集協力をしました。

「最低限の初動時の知識を」と有識者にヒヤリングして、23項目の【危機管理の要諦】を作成しました。

書いたものを「これがあなたの役割」と言って渡してもピンとは来ない。文章だけ読んでわかるものではない。経験者にしか伝えられないことがある。

首長としての経験を一番しているのは首長。だから首長にインタビューし、「首長のメッセージを伝えるプロジェクト～特に失敗のメッセージの共有を～」として提供しました。

《市町村長が語るメッセージ》

① 台風23号(2004年)の経験から

「トップは覚悟を持って！そして市民に覚悟を求めよ」

② 能登半島地震(2007年)の経験から

「図上訓練とは違っていた災害時」

③ 有珠山噴火災害(2000年)の経験から

「死者ゼロは偶然。深酒で初動に失敗」

④ 伊豆大島土砂災害(2013年)の経験から

「甘い考えは絶対持ってはいけない＝最悪を想定しておく」

◎1日前プロジェクト(内閣府ホームページに掲載)

「1日前プロジェクト」は、被災から一定期間を経過した被災者・被災体験者の皆様に、「もし、災害の1日前に戻ることができたら、あなたは何をしますか」をテーマに ①被災直後の行動 ②体験を通じて上手くいったと思うこと、失敗したと思うこと ③そのために日頃から何を準備しておけばよかったか といった本音の話をお聞かせいただき、これらの話から導き出されるさまざまな教訓や身につまされる体験をショートストーリー(エピソード)に取りまとめたものです。こうして取りまとめたエピソードを広く活用・普及させることで、地域のコミュニティや国民一人ひとりに、防災・減災への関心や意識を高めていただくことを目的としています。

《内閣府1日前プロジェクトより》

事例1 《もう一人 宮古市の消防団員の話》

私の家族は震災2日前の地震の時に避難しなかったのです。私はそれを聞いて、非常に怒りました。「何はさておき、逃げろ。消防団の仲間にも住民にも示しがつかないじゃーないか」と。おかげで震災当日は、無事に逃げおおせて助かったのです。その上家族は周囲の人にも迅速な避難を促すことができたそうです。

事例2 《釜石市 災害当時小学4年生》

おばあちゃんは「逃げなくていいよ」といったけど、私は「逃げなきゃだめだ」と思い、おばあちゃんを説得して一緒に逃げました。どうしてかというと、小さいころから、親に「ここは海に近いから、昔も津波がいっぱい来たんだよ」とうるさいほど

言われていたからです。



中川 和之氏

萬年一剛氏(神奈川県温泉地学研究所 主任研究員)と箱根についてやり取り

2001年はエポックメイキングな年で箱根山が噴火しかかった。

そこで、GPS等の地震観測計を整備したところ、地震の数を非常に多く観測した。通常は国や県がハザードマップを作成するが山口箱根町長はハザードマップの作成に取り掛かった。2014年には噴火までのシナリオを完成させた。

2015年5月の大涌谷の火山ガス噴出の規制等の対応はそれに沿ったものである。

いいところは出来ていること。何をやるにも10数年かかる。

アンケートより

・普段お聞きできなかった内容なので、首長の意識が災害の際にどのようになされるべきか理解できた。

・市町村のトップの方々の考え方が少しわかってよかった。中川先生の講演と他の方のお話のリード?引出?が素晴らしいと思っています。

・危機管理を意識するわかりやすい言葉と事例が心に響いて意識の高まりを感じ、実際に地域で役立てたいと思った。

・トップの決断の大切さを認識した。災害は起きる。身を守るのに最後は自分と思う。

防災講演会② 命ある限り、伝え続けたい

「自分の命は自分で守る！！」～備えがあれば神戸の被害は半分で済んだ
人と防災未来センター 語り部 長岡照子さん（90歳）

2015年11月22日、神戸から平塚に再度（3回目）おいでいただき、午前中は大磯町町立図書館で、午後には平塚市民活動センターでお話をいただきました。

◎1995年1月17日5時46分

地鳴りにふと目が覚めて、もう一度寝ようと思ったとたん、どんと突き上げられました。

「飛行機落ちたで！」と息子に叫んだ、私は筆筒の下敷きになりました。息子が台所を通過して、私の部屋を素通りして、玄関を開けに行きました。

ドスドスンと体当たりする音がします。

「おふくろどこにおるんや」、筆筒をコンコンと叩いて合図を送りました。

「痛いけど辛抱しいや」と言いながら筆筒の下から引きずり出してくれました。

治療してもらったけれど、麻酔はあまり効かない。痛かったです。

なんとか歩けるようになったけれど左足が痛い。今も持病となって続いています。

瞬間に6434人の人が、亡くなりました。内陸直下型地震でした。

◎かまぼこ板の表札

ある日お年寄りが「私の家がどこかわからへん」と言っていました。仮設住宅は、同じような家ばかりで標札がないことに気がつきました。そやそや、家にかまぼこ板があった...

10枚足らずの標札を作って自転車で運んだら、皆が欲しがって取り合いになりました。

新聞社に「かまぼこ板下さい」とたった一行の広告を出してもらった。すると、県外のうどん屋さんやお料理屋さんがきれいに洗って宅急便

で送ってくれました。センターに来る子どもたちが、封筒にかまぼこ板一枚を入れて送ってくれました。

◎長岡さんが推薦する防災グッズ

お水が大事、災害時報道されたように、ホースに穴があいてこぼれるお水、車道のお水、こんなお水がとても大事でした。

だから準備したお水は、倉庫でなく、玄関のそば、等すぐ取り出せるところに確保して欲しい。

★ 災害が起きた時何が必要か

▼水 飲み水／雑用水(水洗トイレ・・・雨水などを受けておく)

▼笛 幼児 高齢者

▼懐中電灯(予備電池をくっつけておく)プラスチックの安全ピンで敷布団に止めておく。

▼フィルムケースに10円玉(今は携帯があるけれど、当時自分が公衆電話で電話して残った10円玉は電話器の上において帰った。)

今は、メールは災害時でも届く。メール打てない方はメールを打てるようになって下さい。

▼自分の目で電気のブレーカーはどこか確認しておく。

▼自分の目でガスの元栓を確認しておく。

▼会社の引き出し 必要な食糧とお水、履きなれた靴を入れておく

▼ガソリンスタンドやコンビニは丈夫な建物で情報が入る。乗用車はいつもガソリンを満タンにしておいてほしい。

▼簡易トイレ(一人用・4～5人用):バケツ・丸いゴミ入れに袋を入れる。

▼常用薬がある方は処方箋のコピー

▼生理用品:男女関係なく用意する。若い男性が僕たちにもくださいと欲しがった。

⇒「ケガした時の応急処置に一番役に立つ」

▼さらし／セーター

ひとりで避難所まで行ける。

火事場のくそ力もあるけれど、さらしはおんぶ紐にもなる。

▼照子用ベスト(長岡さんが考案したベスト)

裏にいっぱいポケットがついている。あらゆるものが入っている。このベストを着ていれば、2～3日は暮らせる。

▼災害ダイヤル

災害ダイヤル171 ...いないと覚える。

▼青い公衆電話は災害電話、災害の時も使える。

▼予兆:犬・猫/雲の変化

ネコが冷蔵庫の上上がったまま二日ほど降りて来なかった、⇒⇒ 三日目に地震が起きた。

参加者アンケートより

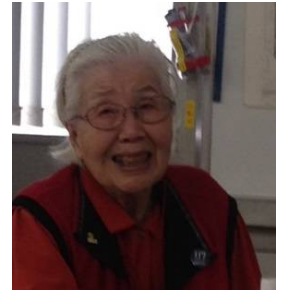
・実際に直接被害を受けた被災者である長岡さんの話は本当にインパクトがあった。

・90歳の長岡先生の話ぶりがしっくりして驚いた。被災時の具体的な必要物の説明がよくわかった。

・**「自分の命は自分で守る。守った命で人を助ける。」**伝えるためには真心が一番大切。長岡さんの大切なメッセージを受け止めることができました。勇気を持つことができました。

・長岡さんのバイタリティに感じ入り、自分も何ができるか考え行動を起こそうと思います。

・長岡先生の講演を聞き、阪神淡路震災の語り部として日本全国で講演されていていつまでも末永く活躍してください。すごく感動しました。



長岡 照子さん

防災カフェ① 働く犬を支援する NPO法人働く犬を支援する会 副理事長 栗田 直枝さん

今日は3点をお話します。身体障害者補助犬について、当会 NPO 法人働く犬を支援する会について、同行避難の取り組みについてです。

身体障害者補助犬法では盲導犬、聴導犬、介助犬を補助犬といい、当年4月障害者差別解消法も施行され、使用者は罹災したときに避難所や仮設住宅に補助犬を伴います。

私たちの NPO 法人は社会に貢献する犬たちやその使用者の支援を目的に、講演会や Web を使った情報提供、地域の催事や学校からの依頼により学習などの啓発活

動、“はた犬ケアハウス”の運営(介助・介護・看取り)、を主な活動としています。

発災をしたら一般のペットは同行避難(環境省ガイドライン)ですが課題山積で、犬の社会性向上に向けた準備のほか、弱者の視点で避難を考えることで防災力を上げる、避難所運営等について多くの立場で話し合える場の実現、などに向け連携し活動を行っていきます。



防災カフェ② 「方言漢字と災害伝承」 相原 延光氏

本題に入る前に、「びやく」の位置とその背景となる地形の生い立ち、歴史的背景について説明がありました。南関東の以下にあげます各地で土砂災害を意味する「びやく」という方言があります。かつてあった局所的な地名ですが今日ではほとんど知られていない「小名」の一種です。いろいろな文献を参考にしてみた結論は、古代からある大和言葉ではなく、中国大陸から伝わった言葉であるようです。「びやく」は漢字の「關」または「辟」にあたり、呉音(古代中国の三国時代)に使われていた「崖が突然切り開かれる」という意味で、訓読み(古代からの日本語では「ひらく」に当たることがわかってきました。どのような経緯で方言化、災害地名として定着したかについて井上公夫先生(砂防フロンテ

ィア機構)と共同研究を続けています。今まで発見されている場所と崩壊している地層や岩石をまとめると、以下の①～⑤の地点になります。①伊豆大島(溶岩及びテフラ←台風による「土石流」)②三浦半島(江の島、逗子、横須賀浦賀)＝逗子シルト岩「地滑り」、葉山層の凝灰質砂岩「がけ崩れ」③丹沢山地(山北町箒沢)＝トナール岩の「がけ崩れ」④多摩丘陵(町田)(関東ローム層の粘土質火山灰層)⑤火山麓(河口湖)＝富士山の溶岩流および土石流。」



防災講演会③『平塚市共催事業』 災害時の要援護者支援を考える NPO 法人 東京命のポータルサイト 監事 中橋 徹也氏

2016年2月28日(日) 平塚市民活動センターにおいて、昨年に引き続き要援護者支援を考えるをテーマに防災講演会とワークショップを開催しました。(参加者59名)

- ・東日本大震災の要援護者と支援者の被災実態
要援護者避難支援にあたった支援者が多数犠牲になった。(消防団員254人、民生委員56人)
- ・要援護者対策の要点と方向性
 - ① 地域で想定されるハザードの性質や特徴をよく知る (②③④略)
 - ⑤ 弱さの高い人は、周りからの支援とつながるように環境整備を進める
 - ⑥ 地域の持つ防災力の考慮が重要
- ・私が取り組む3つの要援護者支援の取り組み
 - ① 災害時住民支え合いマップ

- ② 災害ボランティアから地域包括ケアに
- ③ 災害時要援護者を防災を考える場づくり
- ④ 私が考える要援護者支援→地域のみんが助かる体制を作ること

・ワールドカフェ

平塚のために必要な取り組みを考える。

なお当会では災害時要援護者支援の連続講座を検討していきます。



市主催 防災講演会

2016年1月23日

1月23日土曜日、平塚市の防災講演会が平塚中央公民館で開催されました。今年『知ってください、私たちの自主防災活動 ～自分たちの地域は自分たちで守りたい～』をテーマに、災害対策課が事前に市内の自主防災組織にアンケート調査を行い、須賀新田自主防災会、ライオンズプラザ平塚見附町自主防災隊、ふじみ野自治会自主防災会、上吉沢自主防災会の4つの自主防災会にパネラーをお願いし、パネル討論会を開催しました。

当会は山田美智子さんをコーディネーターとし、篠原憲一代表をコメンテーターとして協力しました。



パネルディスカッション

この日は防災標語の表彰式があり、続いて崇善小学校の4年3組の児童の防災活動についても発表がありました。

本の紹介 絵本「あの日～おおつち保育園 3・11～」

2011・3・11 の記憶<子供たちと過ごした日々>東日本大震災で甚大な被害を受けた岩手県大槌町の



おおつち保育園園長八木澤弓美子さんのお話を元に静岡ウミネコの会が森谷明子さんの絵・再話で絵本を作りました。

おだやかな きんようびの ひるさがり おおつちほいく

えんは おひるねのじかんだった。

そのとき とつぜん おおきくじめんがゆれた。

(中略) えんちょうせんせいは ひやくにんのこどもたちと 21にんのせんせいたちといっしょにたかだいにむかった。

たかだいのひろばにつくと むかえのくるまが たくさんきていた。ママのすがたをみつけたこどもたちはほっとしたひょうじょうで つぎつぎとかえっていった。

(中略) ふりむけば ほいくえんのたてもものは もうすでに くろいうみにしずんでいた。

(中略) えんちょうせんせいのきもちはおもい。ほいくえんのかなしいしらせがとどいて いたのだった。あのひママがむかえにきた9にんのこどもが・・・

被災後5年となる今、ひらつか防災まちづくりの会は、この絵本の朗読会と今までの保育園や大槌町とのかかわりの記録会を開催します。日時は5月29日(日)午後。時間が決まりましたら会場となる平塚市民活動センターにポスター掲示し、チラシを配架します。

本の紹介 「法律のひろば 3月号」 ぎょうせい出版 800円(税別)

特集：震災から5年 -現場から問いかける課題と復興・防災・減災への提言



当会会員が勤めていた出版社から、防災特集の本が発刊されたこと紹介のメールが届きました。

『この号では、「震災から5年現場から問いかける課題と復興・防災・減災への提言」というテーマで特集を組んでおります。

執筆者は学者や弁護士の先生方で、阪神・淡路大震災から深くか

かわっていらした方や、福島の方など、現場に深くコミットした方々です。法律雑誌ではございますが、自治体と法曹との連携や、住民への支援、復興に向けてできることは何なのかなど、経験に基づいた記述がなされており、参考になる視点が多々あるのではないかと考えております。

私も震災後、釜石、石巻などに個人旅行で訪れたほか、大槌の植樹などは皆様とご一緒させていただきました。その際に伺ったお話、見た景色が、忘れられず、また忘れてはならないと思い、今回の企画に結びつきました。』

【発行】 ひらつか防災まちづくりの会 電話/FAX 0463-34-4094 (篠原)

e-mail goten463star@gmail.com

ホームページ <http://www.geocities.jp/hiratsukabousaimachidukuri/>